



A 00
洒 竹
429



人の境も信じて今昔の事や
る眼と心をいづる程をての
思ふ事唯ひつゝも木花夢はあひ
接ぎあひつゝ地をうづる
糸の通量も来れはきいづる
さきの目よりうづる

東漸

四季混雜

雪と雪と風名もいづる花盤 嵐雪
雪と雪と花名もいづる合盤 園出
雪と雪と花名もいづる日ハ流 露瀉
雪と雪と花名もいづる也希花 琴月
秋の雪と雪と花名もいづる 吟潮
わづらやと雪と花名もいづる 舒紅
雪と雪と花名もいづる 古川



多し野にそけく雲を船屋 岩葛
悦しや小春の菊より 帆 汐志
翹よりあわれまぬ名所の志 凍雲
耳の傍にさうらの空を野寺が 素曉
夕虹やちまた鳥を梅紅葉 露顔
祓うまは塵の拂ふ風の席 東魚
有るまは流し舟のあはれを 黄吻
落る雲の中は消たり水の梅 素桐

風やそのうきくちなる乃後 提泉
氷とくたうみ雲をくちの株 海星
白く雲をみちるくちのきくち 圖半
子せりりや名あり難寺 大魚
は南ゆきふ松の雪やとちの志 諸岩
水あやういの中れきくち 伴真
そあの真きくちく 畠の牡丹 兔園
名月やけきくちく 堀の鶴 大町

胸のハ 稲妻あつた結ぶ那 分我
冥字の灯と名残也時多 朝更
名月やうの枯る浪を 序令
思ふや人のねそね降り花 排隣
そくそくそくそくといふお橋 百里
ありそこの毛いりける田舎ハ 柏十
そあふそあふそあふそあふそあふ 一巴
流送や偶とそくそくそくそく 曉松

一とそくそく蚊やうねや所つさ 筆子
我新の居るそくそくそくそく 履信

兼我の橋

あつたそくそく

吉河

やうそくそく折のりりそくそく 皆可
三人のそくそくそくそく 序令
橋のそくそくそくそく 芦潮
雲のそくそくそくそく 呈笑
明や火と打あつたそくそく 可堂

燕の田ちまふうけりてさ 幽意

鳴もや氷の上より川 氣 圖牛

横たふらぬを風の聲のなきに 沾雨

嵐雪も春風のやうなとき

後を逢の風もまゐる

寒くぬけぬとさきの花より 東潮

稲妻や冬をこけりて松の蔭 未知

あきの岸よりりて花を 撃水

雪の春をさす 白御

白くくぬけぬのりりや梅のふ 新真

いづちの梅の
ゆきとわがて

小わたりや春の梅のふり 梅女

此時に梅よの雲を散れ牡丹 田川

百姓の雲つたり梅や山椿 凍雲

さきの梅より梅のふり 嘉水

あきらけ風のふりて梅のふり 飄雪

丸吟や風よのまゝく鼻乃と
 五月園立て障あゝの力う作
 雲解や店のはよりの中へ生薑
 名月やまを撫とねる恋科
 葉柏のやまゝく落れ教ふ
 お涙滑て枯あゝ星のせれ雲
 山寺の雪を青れ白ひく非
 山水を流しおぬるの紅き水
 倉止

さきさきあひいりて半の側 新田 卯志
時どきや氷く人ぬく柳井 嵐萩
舟きの遠くはて異ややうり新 新田 曉松
落時や枯てりあさるる雪の夢 鉦歌
冬まや雪のふもも新あてて 栢樹
是乃く極より散一人者 白水
わづらふまゝ酌の面れ落葉や 東潮
河風より雪を漏る古紙子 采波作 柳舟

雖もさへあふあひいりて半の側 卯志
春さきさきあひいりて半の側 自章
つゝ柳の胡葱房せむの客 幽意
ふのまて山あふく柳ま婦 幽獨
秋まね肉ふまをふ三ふ若妻 一奉
川まよふ雪やほつるさ若し深 沽雨
雪の時ふ二股ふ落れ林うれ 士子
炬火のうらみく雪く雪の毛 新真

まうゝね極男やうきの日
松のついであやむく燈のて
日のあつらんらんや車た
明はと燈は燈しうきあふ
危丁の燈もさうさうあふ
初雪と金きけあふの早う
売らんらん日の目だらん
棒うりの位と水と味
文水

明あ日とともむつと五月雨
夕立や船の作子格の下
清た刀とけや作毛の棒
民丁

兼氣のさう
ひしぬ

なりま極夜の日とさ
朝更

山影入門推不出

うけふ氣うけふ折てらん
人の言や雲く流る燈
皆奇
倫燕

管火の焦て薪らん河 柳 言良由 志徳

空竹や破る漸く火の赤 本音 直量

送り火や持込斗を物多あり 西乃

迎火の形の色錦糸古井の 免園

蝶の羽を翳りて夕日のかげり 本音 渚岩

昔と草もくらはつのもてはる蛙 本音 銀雨

つ夜風と千の三軌をぬきけり 同 六巻

いま世のつそりて智れ白ひ 同 舞花

打こぬと雲の下水や杜より 呈英

葉筆の水のま同くすこく 上り 塗潮

雪の宿ま白く 初時雨 後四 琴月

ゆきとくく一人の涙を煮島 後四 船雪

山科や半の尾を啼く蜂のころ 新田 有隣

やうむく若菜をえよる若の陰 新田 梅友

雲とく同の雲のまをく飛ぶの雲 同 ト志

一葉くく二葉くく三葉くく 同 枕流

ほうきやうののちと川のえ 序令
 炭竈や炬ぢりゝゝてぬの色 圖牛
 骨はれゝ耳と乾く免くれ 白水
 早し女で男ゝ投げたうり 東潮
 びん人の船のゑの編み介 西帰
 物あそび揚のそゝふ要ふ 朝叟
 後む後のはやまるをり 序令

戯として著すの
 揚ぢり

橋の四章

青かつれ橋とて西を夢に連入
 乃こゝろか懸りてゝ名も無き
 是れ伏の末乃強ういふ世に
 有るこゝろよとのめはるまじ
 湯田川のそゝ目らねる目らね
 さらけの橋はれと有の西の橋
 ひこけのそをそあて西國の
 橋の名を傳へていふ形
 亀はあかてぬ甲はぬ細の柱

ゆりのく 鈴掛まづの 新男は
 信よりこゝ 飯八荒に 橋をう
 けをう ぬるう 車やうの 小座
 らへふ 代の 竹も 竹も 越したの
 爺めめと なるつて けふは 今こそ
 う 精と なるつて あづき 友と なる
 中々 忽ち 橋を ぬくやと 響く
 響く くるさや けふは 今こそ
 鳥帽を けひは 解りて けふ
 衣を けふは けふの けふは けふの

賢甲卿の意の月之山所の河の
 之之之之之之之之之之之之
 おとく之之之之之之之之之之
 之之之之之之之之之之之之

武藏野より海を渡る

つと路を走るもの如きは、
 路の邊をせぬ所す方の水
 もとあら老木の方路と云
 群るひまの棒と隆くは衆の

うらまへし 都を 帰る ぬ 夜を
熊の 夢を わたり ゆく 人の 影を
の 国に あり とも あり とも 顔て 金す
る 二 都の 月 築中 の 夢川 版
を 一 とも あり とも あり

楊柳や金のかゝるまつの色

ふらふらと 楊柳の 葉の 色を ぬ
人の 影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ
ゆりひ 海苔の 葉の 色を ぬ

やさしげ 市街の 影を ぬ 影を ぬ
影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ
影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ
影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ 影を ぬ

東潮

元禄十稿中春より

農の隙まゝわくさん畑を 園出
 初鰯あきくくする牡丹か 嵐雪
 猪より修つ初の鰯よりか 朝更
 目とくくくくくくくくくく 仙鶴
 雪や松とくくくくくくくく 撃氷
 日よ短く夜の松乃松く非 露鶴
 雪のりやうまきくくくくく 鶯吻
 雪のまやうまきくくくくく 新真

星やうき藤松らりり涼海 柳暗
 秋よりやうきの名れは鶴松花 素秋
 牡丹んや羽織とぬそり床り 排隣
 紫よりくくくくくくくくく 栢十
 秋のゆきやうき床りくくく 井石
 雪のりやうきくくくくく 凍雲

牛馬のふり
 鎌田のふり

湯村や井の向も雪り梅の雪 序令

歌あるのまゝなまや東の春 名山
あなはるまゝの春なりまの風 沾水
つゝいふなりそまゝな水鶴か 立些
浅窓でなりし小舟なま風か 曉松
あなはるまゝなりまの初冠 栄堂
能あつゝまのけをま相伝ふ 東潮
松風や小雨と松の蕊の幕 振拱
なほなりま風流なりや春の梅 同 鷺峯

春月や何と打つる松のま 新真
菜の花を待たる春を霞の松 立嘯
あなはるまゝなりまの春 琴月
古松も冬に自らの春のま 如竹
晴窓や眺むるまゝなりつ松 吟潮
なほなりしそまゝなりまの松 倫燕
なりしそまゝなりまの松 醉月
春あなはるまゝなりまの松 夢雪

丁乃もて水の露老の依りぬ 金阿

花の物語のいへ

あはれのことく

初蟬や又つあそそ秋の蟬 四川

吹く風そまきさるる白く 街月 同 春林

風く疎よ花ぬき芽独夜 同 翁言

ま雨や半の顔のつ 東 松雨

ふ垣のつ隅ふゆれ雲う作 東紫

竹のふれれやね雲屋ふ何心 素養

そよの臨窓の裏轉り入るうね 一巴

吸ううくの風よこしらなり雲の屯 素曉

隙をきくもの下園の鈴かりト 芦潮

相寄やききうゆらぬたりー山 呈笑

追くと顔ゆめうと杜丹うか 東潮

雲花夜半の子程やふたりけ 琴月

花屋の水とさそー市松の雲 吟潮

卯の夜の夜記羞明ーとるの他 既白

梅より花の結まり奥の寺 序令
悠きりて黒山をさうくろく 茅潮
伏穀と其まも参り月夜に 宗和
梅より花の結まり奥の寺 如仰
豆腐串一ぱ作れり花の香 録合
あなもそくくわ花の荊薔薇 直重
岸より花の結まり奥の寺 東潮
秋のめり花の結まり奥の寺 圖午

本井のうし

花の結まり奥の寺

川流や肩れ花の結まり奥の寺 琴月
そくくわ花の結まり奥の寺 黄吻
風や花の結まり奥の寺 治山
あなもそくくわ花の結まり奥の寺 嵐秋
あなもそくくわ花の結まり奥の寺 梅友
梅より花の結まり奥の寺 西帰
あなもそくくわ花の結まり奥の寺 古川

い柳やとらとをまに郭と一楓

風やちやかのまひ一庭簾本曾直重

立派な漆が也ま芥みのむ新田排和

郭と程ち振乃花見うね同友交

つまうりうあめ枝折れ霞うね如鶴

まの庵虫う滑う切毫如桂

一一一奥や銅場銅を拵とる朝更

初雪やちうい句くまの中小音

峯とくし庭の骨の日影うか東錦

独りあけ惜や花簾の郭一愚言

淀川の卯のむすへの車水雪

雪のうけを園いなる様よ
好るんどのそやの協のゆよ

まきけ句よなみあるや雷の夜東潮

いとねや客の中より風巾圖半

友川や水水情う海うい文雀

つ輪や月夜う庭で白牡丹鴉我

草中咲ぬ蝶もくわゆる藤の 大宮 白盆

あゝ割字をあれと云ふ何處 京 光寛

碓のつる九止してささる 出雲 左波

名月ととやと云ふ幾く 遠加 嘯翠

百と集やいひ子寝る 新真

戸と明て寝る 治山

石原と云ふ食寝 新田 文雀

雲霞や霞奇の果尾 ト志

鶴あやばまうけて乳鶴 鹿峯

明とて雲の低 世良田 和友

鶴あやばまうけて乳鶴 志徳

誰何 圃出

う 栢樹

う 東潮

わ 幽意

梅 沾雨

焼ゆか荒のちりね馬指 ト志
けり地りねく霞き里の海を 如竜
集ゆわくをり一時の花の園 信助 吐虹
驚ゆわく杉乃梢の枝を 甲加 安子
折るより雀花散れ曇さくね 東潮
よの舞舞のちりねくしり 序令
風やちりねくの中よりちのち 朝豊
ちのちや日の目とて風如 皆可

さくや越鼓律をか鳴る 瀬西 灌木

泉氷と湧りしりねく水鶏 船雪

山溪より内懐の本の女 文雀

驚と鳥公あつとちねと
白きよとすくは面虫のちりや

大倉

神霊の根ちねく富士の雪 銀雨

猫じりや枝のちりねく梅 由衣

糸のぬねとちりねく雲うか 如桂

槿の老とちりねく竜雲のち 巴紋

なくと鶴を打たりむ涼うか 白盆
落るるぬ桐のつ葉や 船つ 志徳
むしき蝶やいのまを足牙 文雀
赤肉雲の夜をやつとさう 舒紅
とと産る蜆の山田の初まら 銀雨
見つけて梅を落る早月来 六菴
行の音と客とさうも化板か 勢花
吹く来ぬ風とさうも前の越ふ 可堂

膝よりさすあひぬき 水好ひ 卯志
曇りのと三穂もかりぬき 菰 寄
白屋や田面も動く星のり 大奥
尻足や浅草市の論語漢 民丁
富士の根や雲も露も 早雀 呈葵
物陰や若菜の花もつとあり 琴月
朝顔の日向と花の日雲うか 古川
妹がまた「恋座」を食のる 岩鳥

時を相の相のうゝより 枯す
秋を人雪を人すく 龍作松 準松
虫の毛人うめ唐の 國狩裏 一楓
け後から人の松をうるのれ 幽道
初草やすぐきてもあふと通 六卷
川よりけのうらま 夢の音 序令
雄水の流るひの比つてくさ
くさくさくさくさくさくさく
おろおろよきききききき 山風 朝叟

秋仙

其角

辻ぬや雪をうきとくわ 影
陽を云をうきとくわ 東南
人あふれとて 談離るそ 圖半
あふれとて 御逆金相 伴真
待月のうら打せかき書 大魚
金い盆より 於家相の果 兔園

風寺と信のゆりゝ裏糸 東潮
船を揚ぐと 蠅跡ふ舟 其角
傀儡を里龍 其角の人 兔園
跡先きゆくゝと 糸糸の糸 圖半
指し世を以て危ふき物なり 其角
みえくはふと 海の上 大奥
雷く 漆く の 家持なり 伴與
残と 糸く 指し糸 虫貫 東潮

入席を致さるるの三月月 大奥
富士の秋をぬるるあや 其角
指し糸と 糸の糸の糸 兔園
耕やうく 糸の糸 伴與
おとくとうと 糸と糸の糸 圖半
歳終の糸の糸の糸 大奥
百年の糸と 糸の糸 東潮
やうく 糸の糸 兔園

み解ささるゝて病にぬるゝ出 伴真
火焼のうさき石にうら九才 圖牛
雲衣飛うゝあえそまの體 太真
芭蕉の香とらけ寸菊水 東潮
ととわの調ふわゝる結の毛 其角
ゆゑを家の一唄の情 燈 伴真
人夢の袋切うてスゝるる月 兔園
トはとんせゝるゝるゝの夢 圖牛

こゝろや溪の秤わうき 東潮
数とてうすゝと醫まゝの唇 大真
花うゝさよ歌の側乃々添 圖牛
獨田く漕ぐゝるゝるゝ 兔園
るゝるゝるゝるゝるゝるゝ 伴真
吾てぬりゝと歌うゝのつて 筆

秋仙

沾德

鶯乃紅梅音多夕日
杏猶うまふ村墮の夢水
不懸て櫓をさるやふ
草よりあられと海を鯨馬
休くとも木柄松の月
秋風
筆

東潮

朝更

全所

仙鶴

朗曉くく月病の帝又鑑輝
 暫深くく月くく月
 唯有り乃山を寺領の湯之
 之揮くく老の湯之
 羅くくお給ふくく
 十國よりくく
 嘉くく金とくく
 歌中の裏くく
 東蘭
 沾徳
 全阿
 朝叟
 仙鶴
 東潮
 祐徳
 仙鶴

東潮 沾德 全阿 朝叟 仙鶴 東潮 沾德 仙鶴

佐々木、赤松丹の町にちたふ
白鳥、鳥を怖て、ひるひる
林、香るる、心、お月、の歌
解毒、毒の魔の、あ、ぬ、は、州
花、花を、お、と、や、う、燕
思、く、百、く、く、祥、う、る、り
或、時、を、く、れ、事、お、と、た、地、を
く、く、く、あ、う、する、白、波、雪、の、石、二
東朝 全阿 仙鶴 朝叟 沾德 東潮

朝叟 金阿 東潮 沾德 仙鶴 朝叟 金阿 東潮

穠りて喰ふまね籬の中折て 沾徳
樂屋の沙汰の途より橋 仙鶴
大へより自居と云ふ裾気 朝叟
初よりと云ふと乃賣種 全阿
井輪よりもさふ人れを 東潮
ろろ元々ねとちの底 沾徳
片終家のはしく並川の月 仙鶴
樹のさやり音とちけり 朝叟

荒るのさても秋乃響き 全阿
活ある母乃お東の尻 東潮
な言しくお猫の足やねん 沾徳
揚屋の吐き物と云ふ種 仙鶴
吾家といふゆゑと云ふ恋 朝叟
ありけおつかぬと云 全阿

歌他

園出

云秋初る道冷や若乃川
寒あす秋一燈影也
揺揺と陽陰解雨く心ゆく
琴の元あれとよの山雨痛
そめりるらん月一影
二十の昔もあそく物あすの細
園出
幽意
幽意
幽意

跡と先とりて返はる廉の飛 幽獨
 定極のねえとさう一報を 幽意
 寄書これ日の保氏教にちあはる 幽出
 是風名の内くあふらん 幽獨
 さいふと女の乳房をささる 幽意
 羽織の控ねおくれ作達 幽獨
 半は清くさふたふさふさの月 幽出
 同の西れと吹さるる海 幽意

興る寺本曾中その音廉こ 幽獨
 いはう極座をひひるゆわ力 幽出
 つとまりあはるくさむあの花 幽意
 薄葉なり 葉さく人うぬ 幽獨
 浮懸忘の席に新漢教とさう 幽出
 ちやうとれ歌のまゐる 幽意
 大はらとと極つる彼の妻 幽獨
 云へく抱くつ儀の妻 幽出

幽々たる夜をいふに裁けず 幽獨

雲の鳥乃侍をいふに 幽意

松木よりいふに根をいふに 幽獨

揚鞠清くいふに思ふに 幽獨

恥れいふに言ふに聲をいふに 幽意

若くは有弦の聲をいふに 幽獨

いふに月をいふに 幽獨

松林をいふに 幽意

水秋をいふに 幽意

船をいふに 幽獨

巾箱の布をいふに 幽意

布衣をいふに 幽獨

俗の民をいふに 幽意

俗の根をいふに 幽意

糟粕乃おろし

水貫ふみ

壺

白梅あまの雪乃雪
つねの事やうつや下園
いづれいづれをぬき
雪をぬきをにわぬ
は河原と船押さる
まゝそぬ目と編み
菜

なぐさみとちちる雪の時より 同川
とちちる雪とちちる雪の時より 立無
少信との陽あそ水の中へ移る 文水
穂のまをかりたりよりより 元水
事終るよりよりよりより 同川
ほくく座とんくくくく 皆哥
何事よりよりよりより 鴨足
事終るよりよりよりより 立無

白くゆきやうきやうき 同川
うげを摘み簪としたりより 文水
あの馬よりよりよりより 元水
雪えんよりよりよりより 鴨足
おはつたよる雪か拾ふ火の山 皆哥
とちちる雪とちちる雪 元水

歌仙

嵐雪

致屋乃て作や粟打昌中
蒼鶴うも物と云もまろ
瀑よせむ暮風の所歌三の音高
三つ金杭くも草の氣
照れ月もつれぬの玉もね
所神りとの新くくえ
東潮

雲やうの跡う乾う せ泊師 栢十
くおを忘して入おの鏡 嵐雪
うけくあし 敷角掃でを来立 朝更
二ねの文のもろろろろろろ 撃求
抄繪と膝まひや 結納 東潮
いしとろろろろろろろろろ 神叔
村くろ襷お面敷やせて 序令
神乃 俗や 脈送とて 栢十

書

息災お能くろ世をやり 神叔
二百餘里の中 東潮
ろの枝らんぬろろろろろ 撃求
目とろろろろろろろろろ 朝更
ろろろろろろろろろろろ 嵐雪
ろろろろろろろろろろろ 序令
ちろろろろろろろろろろ 栢十
ろろろろろろろろろろろ 撃求

三

眉合ふ雪の埃とつゝさ 朝更
揚ぐと傘と只の雪をド 神板
泣やんきとつゝ揚ぐ琴の秋 序令
屏風とつゝ只の雪をド 嵐雪
用とつゝ雪の雪の肌を 東漸
寐候とつゝ雪の中を 柘十
きとつゝ雪の中を 神板
ゆゑに雪の中を 神板
撃水

秋の雪の中を 神板
ゆゑに雪の中を 神板
宿務やとつゝ雪の中を 朝更
東漸
大名の雪の中を 嵐雪
足代雪の雪の中を 神板

詭林
志翁孫七

卷一百一十五

七

